

1学年だより

令和3年11月24日(水)

夢の宅配便

1学年学年主任

水野 喜代治

かっこよく生きたい！

先月、63歳の誕生日を迎えました。

60歳は、還暦ともいわれ、干支が60年で一周するので、生まれたときの干支に戻ることを意味します。そして、赤子に戻って人生を再出発することを意識して、赤いちゃんちゃんこを着てお祝いする風習があります。ちゃんちゃんこは、幼児が着る袖のない防寒着で、60歳になって、また赤ちゃんからやり直そうということで着用するわけです。60歳を境に、自分なりに生き方を少し意識して変えようと決意しました。それは、残りの人生を「かっこよく生きよう。」「粋にいきたい。」と思ったからです。粋とは、人の気持ちを良く理解して、さわやかで、純粋な心意気のことを言います。その逆を野暮と言ひ、人の気持ちがわからなくて、卑しくて、洗練されていないことを言います。体調が悪い友達がいたら、何も言わずに雑巾を進んでかけてあげる。調子の悪い友達が「ありがとう。助かるよ。」なんて言葉をかけてきたら、「掃除早く終わらして、外でサッカーやりたいんだよ。」なんて笑いながら応える。そんなところに割り込んできて、「今日は、雨上がりでグラウンドがぬかるんでいるからサッカーできないよ。」などとまじめな顔して言うてくる人は野暮な人となります。調子の悪い人を気遣わせないために「サッカーやりたいから」と方便で言ったのがわからないのはじれったく思います。

いつの時代にも人々がこだわっていた感覚があって、その感覚を大切に生きてきました。例えば、鎌倉時代などは、「恥」を今以上に意識して生きていました。平家物語などを読むと、話の中に「恥」という感覚が貫かれています。源平合戦の屋島の戦いで、源氏の大將の源義経は、海に逃げていく平家を追いかけて馬を波打ち際まで進ませます。その時に、義経は弓を海に落としてしまいます。弓は潮に任せて沖へと流れていき、それに気づいた義経は馬を進めて、弓を取りに行きます。すると平家の武士が海の中に入り込んだ義経を狙いに近づいてきます。馬から引きずり下ろされ海に投げ出されれば、重い甲冑を身につけている義経は溺れてしまいます。沖に逃れた平家の小舟が義経に向かってきます。間一髪、義経は流れた弓を拾い上げて海から出てきました。家来のものどもが「義経様、源氏の大將たるものが弓を取りに行き、平家にとらわれたら笑いものになります。行動を考えていただかないと。」と具申します。義経は体が小さかったので、弓も弦の張りが弱いものであった。「源氏の大將がこのような張りの緩い弓を持っていたと思われたらそれこそ、恥をさらすこと。命をかけて、弓を拾いに行くことこそ武士の魂」と家来に話したら感激したということでした。当時の武士は、「恥」は絶対にかいたならぬものだったのでした。そして、他人に恥をかかせないことも大事なことであったのである。「ごまかせば良い。」「言い訳すればよい。」と考える現代人には理解できない感覚です。

江戸時代は「粋」であることが大事でした。野暮な生き方だけはしたくないと町民は考えていたと思います。相手の気持ちを考える、相手の気持ちを先回りして行動する。そんな粋の文化に共鳴します。還暦を迎えた3年前に、残りの人生を粋に生きようと決意しました。潔く、汚れなく、気遣えて、おしゃれな生き方。生き方にこだわりがなくなってしまった現代、みなさんも何かにこだわって生きると良いですね。